

先生に就ての第一印象でしかも一番その深いものである、秋風の銀短冊、それは所蔵してゐない。

日輪の扇子を我が手に嬉しく眺めながら、私はまた東京を離れるのが寂しくなった。そして、高等学校の受験に東京へ立たねばならない事を先生に話した。

「この扇子が、ですから、何よりの記念になります。」すると先生は、

「あ、高等中学へ……」高等中学、この言葉を、サビタのパイプを中学生が持った頃の学制を知つてゐられるであらう先生の言葉らしく私は聴いた「京都はい、ですね……然し、それはなるべく落第なさるやうに……」と続いて先生は笑はれたが、この一言の諧謔は、ぴしりと私には嬉しかった。

「え、多分九月にはまた東京へ出て来る事になりませう。さうなつたら、曲水吟社へ是非入れて頂きます」と、私はそれが予定で、もあるやうに言つて、日輪の扇子を抱いて鈴の鳴る門を出た。京都では折柄の祇園会の鉾の絵葉書を先生へ書いた。受験の方は、前年の経験から万事呑込顔で、英語の日のつもりで試験場へ入つてゐると、数学の問題を渡されて面喰つたやうな自分だつたから、勿論落第した。が、重ねての失敗に失望してゐる両親の許に帰つてゐると、洛外の自然の趣の思い出だけはさすがに私にも試験準備の怠慢を悔みさせた。せめて、高等学校の三年間は住んで見たい処だと思つた。

九月になるとまた受験生々活に入るべく上京した。しかしもう私の心には何処か私立の大学へでも入らうかといふ考へが動

いてゐた。上京して見ると、史耕氏の家では、長男の、多分子規居士の名に拠つた昇ちゃんが疫痢の疑があるといふ取込最中だったので、史耕氏が心配してくれて、その夜中、同家の縁辺の北村といふ家に私は転居した。其処は赤阪新坂町の谷底見たいな位置にあつて、先生の居の丹後町へは近衛三聯隊の丘陵一つ隔てるだけの近きにあつた。移つた翌日は第一日曜でホトトギスの例会の日だった。私は国から持つて来た山葵漬の曲物の、一夜たつて少し酒粕の匂ひの高いのを気にしながら下げて、丹後町へ上京の挨拶に行つた。先生の前にはホトトギス発行所の山名一二氏が何かの用事で在つた。上京早々そんな雰圍氣の中に入つて見ると、私は勿論受験に落第して京都に住めなくなつた事もさして悔みない心持になれた。勿論その日はホトトギスの例会へ廻つて句を作つた。当時、長谷川零餘子氏が、東京日々新聞の俳壇を担当し始めた頃だったかも知れないが、花囚君は帝大俳句会の関係上そちらへ顔を出しはじめたし、私はホトトギスの例会で、選句披講をする人として零餘子氏を知つて居り、爾後、史耕氏に伴れられて春頃だったか、一度、木村子瓢氏の家にあつた零餘子氏等の小集に行つた事があつた。処へ今度上京して見ると、花囚君から零餘子氏を中心とする一行が埼玉の与野の俳人に招かれて鈴虫狩に行くから同行しないかといふ勧誘が、史耕氏と連名宛で私へも来てゐた。

ホトトギスへか、曲水吟社へか、日々俳壇の方へか。……詮ずればこれは、高浜虚子氏へか、渡辺水巴氏へか、長谷川零餘子氏へか、であつた。私の知る範圍で自分の帰趨を求める心が